

平成 21 年新春

## 年頭所感 2009 : Hope

～ パンドラが残してくれた「希望」と坂の上の雲 ～

日本銀行旭川事務所長

# 尾家 啓之

明けましておめでとうございます。日頃は日本銀行の政策や業務に関して、ご理解、ご協力を賜わり、誠にありがとうございます。旭川事務所としましては、今年も、皆様から信頼され、役に立つ事務所を目指して、所員一同邁進していく所存でございますので、引き続きどうぞよろしくお願い申し上げます。年頭にあたり思うところをしたためます。

### 希望を失わずに、坂の上の雲を夢見て前進しよう

昨年来、あるいは一昨年来と申し上げた方がよいかもしれませんが、世界的な金融・経済を巡る環境の変化には、想定を超えたものがあつたのではないのでしょうか。私自身、このような急激かつ大きな変化は入行以来経験したことがなかったように思います。特に、昨年 9 月のリーマン・ブラザーズ破綻以降の展開は、通常の人間の思考力・想像力を超えて現実が変化していった局面ではなかったのでしょうか。まるで、ギリシャ神話にあるパンドラの箱（あるいは壺）を開けた時のような状態とでも言いましょうか。

ただ、パンドラの箱からこの世の邪悪や災難が噴き出した後、最後に残ったもの、それは「希望」、あるいは「希望を失わない心」などと理解され、今日まで語り継がれています。「未来を予見する災い」がパンドラの箱からかろうじて噴出さずに残ったので、人々に「希望を失わない心」が宿ったという説もあります。経済政策を運営する主体や、経済観測を行う者にとっては、未来を予見できればどんなにいいのに、と思う訳ですが、神話の世界では、どんな困難な現世の中でも、人類に「希望」を与えることにより、前向きに創意工夫を凝らして進んでいける道を拓こうとしたのではないかと考えています。畏敬する作家司馬遼太郎氏に言わせれば、時代背景や局面は異なりますが、「坂の上の雲」を夢見ながら、皆で一致団結して坂を登っていこう、現下の困難・苦難を乗り越えよう、ということになるかと思えます。

今年こそは、出せる膿を全て出し切って、転換点を模索できる年にしたいものです。そして常に将来に対する「希望」を失わずに、どうすれば前進できるか、平常時には出てこない発想を含めて必死に模索する年にしたいものです。

## 必ずよくなる、よくするという信念を持って、エネルギーを蓄積しよう

次に申し上げたいことは、自然災害に人間の力で抗することには自ずと限界がありますが、金融や経済といった人間が生み出した制度や仕組みにかかる問題は、人間の力で解決できないはずがないという強い信念を持つことが大事です。かつて米国ワシントン D.C. に勤務していた経験がありますが、全米のみならず世界中から様々なアイデアを持った人たちが集まり、金融や経済の仕組みに関しても様々な制度設計をしていました。人間が作った制度や仕組みは、必ず人間により変更や改良が可能で、それを実現するのが今生きている人間の使命だとの認識が広く共有されていました。

もちろん、経済は生き物ですから、思ったとおりにならない、あるいは想定外の反応をする場合があります。また、渦中にいるとその時々の中を全貌を理解することが難しいため、その時々何をするのが最適かの判断が難しい。後から、冷静かつ客観的にみてもはじめて全貌がわかるという場合があります。さらに、個々の力ではとても抗しきれない、大きな波・うねりが作用する場合があります。

しかし、今のような状況だからこそ、所詮人間のつくった仕組みは人間に解決できないはずはないという確信のようなものが物事を前進させるのだと思います。マクロ経済が永遠に下降局面を辿るということは、ありえないことなので、必ずよくなる、よくするという信念をもって、経済の原動力を少しでも動かしていこうではありませんか。

これは、何もしないで嵐が過ぎ去るのを待つということではありません。今こそ将来に向けた戦略を練り、充電し、種まきをする時だと思います。今は日頃十分にできないエネルギーを蓄積させようではありませんか。その際、最も重要なことは人を育てる、社員の能力を開発させるということだと思います。

## 道北経済の落込みの度合いは相対的にマイルド

最後に、旭川をはじめとした道北経済は、紛れもなく厳しい情勢が続いていますが、少々広い視野、そして中長期的な観点から眺めた場合、全国との対比でその落込みの度合いはマイルドだ、ということです。全国との対比でみて、先の景気拡大局面においては、当地経済界ではさほど恩恵を受けることなく、浮揚感の乏しい展開でした。その最大の理由は、グローバル経済発展の恩恵に被る企業が相対的に少ないというものでした。

ということは、その一方で、海外経済が急速に減速している中、落込みも相対的にみればマイルドだということができると思います。旭川をはじめとした道北地域の経済界の方々には慎重な見方をする方が多く、よい時には全国比未達、悪い時には全国以下、と卑下される方もおられますが、実態は「道北経済は、どっこい粘り強く持ちこたえている」ということだと捉えています。グローバル経済発展の波に乗り切れなかった分、落込みについては過度に悲観視する必要はない、全国ベースでの報道に振り回されずに、自分の座標軸でやっていきましょうということです。

現に昨年12月に実施した企業短期経済観測調査(いわゆる短観)によれば、道北地域の企業の業況判断D.I.は前回(9月)調査比6ポイント改善して34ポイントとなりました。一方、全国ベースでは大企業製造業で21ポイント悪化して24ポイント、全国中小企業で見ますと7ポイント悪化して28ポイントとなっています。道北企業における改善の背景としては、非製造業において「遅れていた公共工事の発注がようやく進捗した」とか「一段と悪くなっているわけではない」などの理由から、一部企業の判断が上方にシフトした、すなわちマインドがやや好転してきたことがあげられます。先行きについては、製造業・非製造業とも大幅な悪化を見込んでおりますので、決して安易な楽観論をとるべきではありませんが、現下の情勢の下で、道北調査対象先企業のうち42%が「悪い」と認識しているものの、50%が中庸の「さほどよくない」として何とかやっているほか、8%は「よい」と回答してきています。先行きに関しても6%の企業は、引き続き「よい」と見込んでおります。

さらに、雇用環境を考えてみましょう。当地では、新規求人数が一貫して前年割れ、有効求人倍率も0.4倍台と低位で推移しており、とても厳しい状況が続いていますが、昨今全国紙で報じられているような派遣切り、新卒者採用内定取り消しなどが広く横行しているわけではありません。これは既に厳しい状況を想定して、採用を抑制的にしてきた結果だと思えます。上記短観における道北地域の雇用人員の過剰感が、若干ではありますが、減少してきています。

12月短観におけるこうした事実も念頭におき、決して悲観することなく「希望」をもって自社の強みをより研ぎ澄ませ、人を育て、将来に向けた蓄積をしてまいりましょう。

末筆ながら、今年一年の皆様方のご健康とご多幸をお祈り致しております。

以上